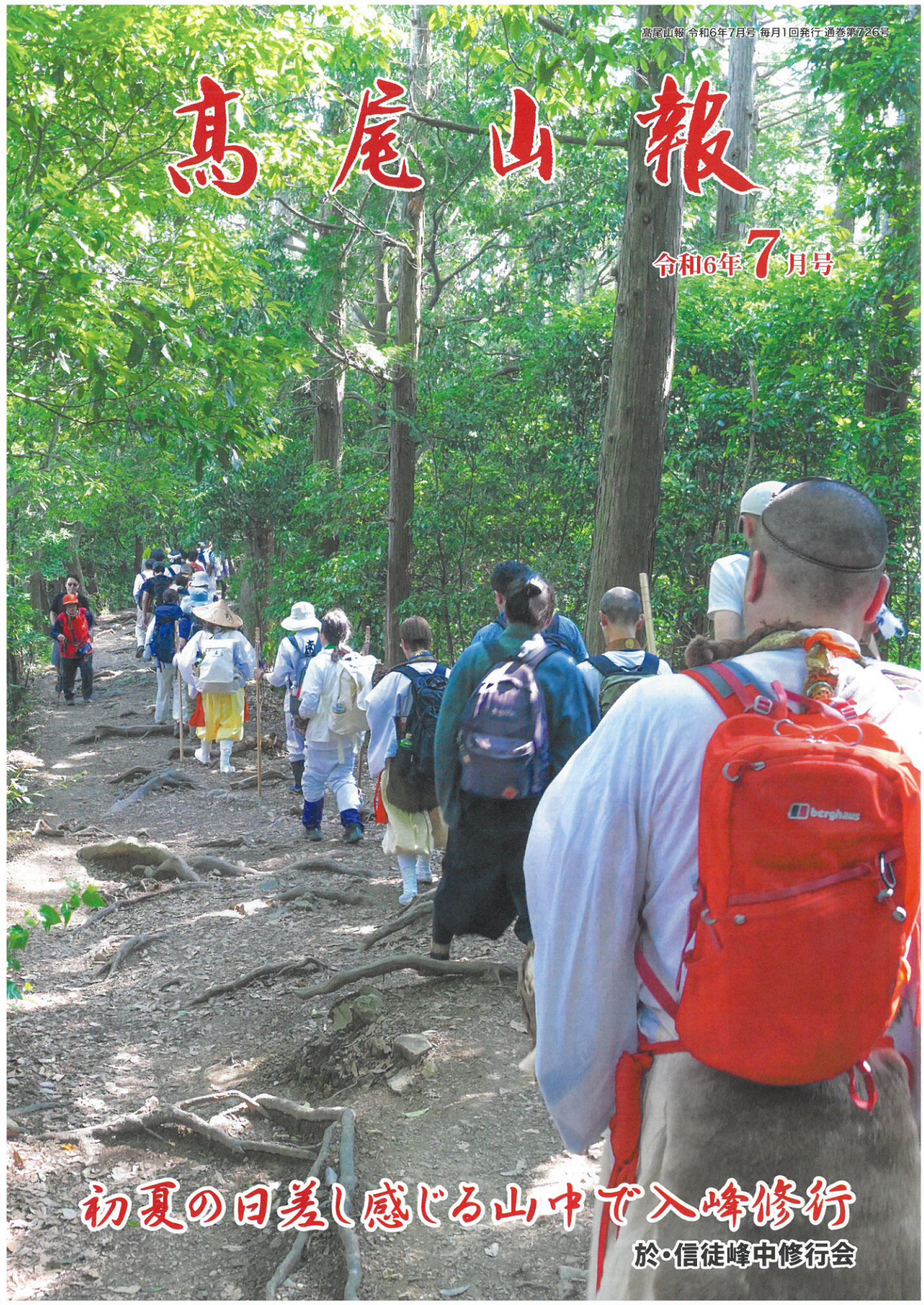


高尾山報

令和6年7月号



初夏の日差し感じる山中で入峰修行

於・信徒峰中修行会

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(145)

今年の関東地方の梅雨入りは、例年よりも二週間ほど遅かったそうです。人間には鬱陶しくも感じられる日々ですが、山の木々や草花にとっては待ち望んでいた時節の到来でしょう。恵みの雨を全身に受けて、緑色もいっそう深みを増してきました。力強く成長している姿に、みずみずしい命のきらめきを感じます。

「雷が鳴れば梅雨が明け」という諺があります。天正十一年（一五八三）五月十八日の日記に「今日雷なる、つゆあかると見たり」（『多聞院日記』）と記されているように、梅雨空に鳴り響く雷鳴は、古くから梅雨明け間近の合図と考えられていたようです。それは本格的な夏の訪れを告げる足音のように聞こえて

いたのかも知れません。垂れ込めていた雨雲が去ると、明るい太陽の陽射しとともに元氣な蝉の声も聞こえてくるでしょう。梅雨時期に生い育った夏の草花も一気に見頃を迎えます。

はちす葉の濁りに染まぬ心もて
なにかは露を珠とあざむく

（古今集）僧正遍昭
蓮の葉は泥の中で育つても濁りに染まらない清らかな心を持つているのに、どうして葉の上の露を珠玉であるかのように惑わせるのだらうか）
蓮は泥の中にあっても茎を伸ばし続け、やがて空に向かって美しい花を咲かせます。それは「泥の中の蓮」と言われるように、汚れに染まらない

清らかな花として、古来から多くの人々を魅了してきました。

この「はちす葉の」の歌では、蓮の葉の上に置く露の輝き（「露の白玉」）が詠われています。「蓮の上の露の願ひ」（願わくば極楽浄土の蓮の花の上に往生したい）という言葉も回しもあります。皆さまをいつも身近に感じていた僧正遍昭だからこそ、露が宝石のように映っていたのかも知れません。

心のはちす開けなん
願ふ涙を

（源俊賴『散木奇歌集』）
（植えておいた蓮のような清らかな心が開いたよ。仏さまのご加護に感謝する恵みの涙を潤いにして）
仏教では、人が生まれながらにして持っている清らかな心を「心の蓮」と言います。長雨の季節は過ぎ去っても、仏さまを願う心の潤いは枯らすこと

となく保ち続けることができれどと思えます。

さて今月号では、日本の東の境界から、特に現在の青森県に伝わる弘法大師空海（七七四〜八三五）伝承について書いてみたいと思います。青森県唯一の官撰地誌である『新撰陸奥国誌』（明治九年（一八七六））を見ると、例えば青森県東部にかつてあった道仏村（今の階上町道仏）の名前の由来について、次のように書かれています。

昔、弘法大師が衆生結縁（生きとし生けるもの全てと仏法の縁を結ぶこと）のために諸国を旅していたときのこと。都から遠く離れたこの村に立ち寄り、民を思いやつて阿彌陀如来の像を、手ずから彫り刻みました。

そして、お大師さまは神仏の功德をお説きになり、さらには人と人との結びつきの大切さを語られました。その親身になつて教え諭してくださいました言葉と、道のほとりに仏



雷鳴が響き梅雨が明ける

さまを安置してくださいました。縁によって道仏村と名付けられたのです。

（『新撰陸奥国誌』）
また津軽地方に目を移せば、大鰐町と平川市碓ヶ関の境に聳える阿闍羅山にも、お大師さまをめぐるお話が伝わっています。

弘仁年中（八一〇〜八二四）のこと。お大師さまは遠くこの地に来て阿闍羅山をお参りしました。霊場（神聖な地）であることに感動すると、天下太平のために理趣三昧（『理趣経』）を誦する勤行の法会を執り行いました。すると山上に紫の雲が

高尾山法類会定期総会

六月五日（水）

薬王院と御縁の深い寺院の集まりである高尾山法類会が開催されました。初めに薬王院の有喜閣大広間にて研修会が行われ、長きに渡り高尾山に奉職され、現在は東京多摩教区長福寺住職にして、智山講伝所上座阿闍梨として活躍されている飯沢秀三僧正による「高尾山の思い出」と題された講演が行われました。

その後八王子市内に会場を移し、佐藤総裁より御垂示、犬山会長の御挨拶の後、近況報告、新入会員紹介等の議事が進行され円満に閉会となり、続いて懇親会が行われ、旧知の会員同士で和やかな時を過ごされました。



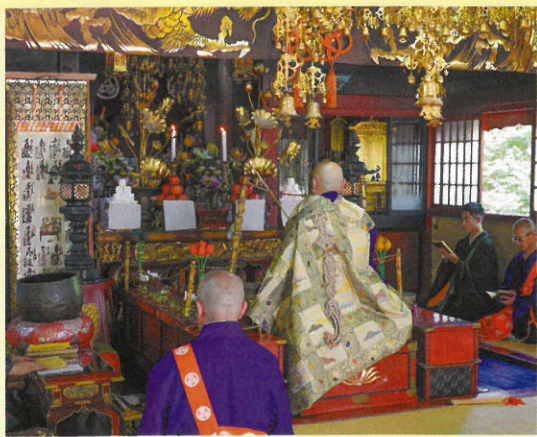
飯沢先生による講演「高尾山の思い出」



八王子エルシィで総会が行われた

弘法大師降誕会

六月十五日（土）



柵引きました。さらに祈りを捧げると、ちようど満開のツツジで彩られていた山並が、紅緋からいつせいに紫色に変わったのです。それからというもの、阿闍羅山には紫ツツジが咲くようになりました。

（『新撰陸奥国誌』）
阿闍羅山は、山頂に不動明王（梵名「アジャラ」）が祀られているお山です。青森県のスキー発祥の地とも言われる山ですが、今でも紫色のツツジが咲き乱れているのでしょうか。

（『曾我物語』）に「東は安久留津軽・外の浜」として語られている日本の東の果て。とりわけ津軽の弘前は、寛永三年（一六二六）、弘前藩二代藩主であった津軽信枚（一五八六〜一六三二）によって、最勝院（弘前市銅屋町）を筆頭寺院とする「津軽真言五山」（最勝院・百澤寺・国上寺・橋雲寺・久渡寺）が定められるなど、古くからお大師さまと関わりが深い地域です。明治元年（一八六九）の神仏分離令（廃仏毀釈）という宗教

金の泥に朽ちず
蓮の水に染まぬ

（無住『沙石集』）
（金は泥の中でも輝きを失わない。蓮は泥水の中にも濁りに染まらない）
阿闍羅山の紫ツツジとともに、今なお人々の心の奥底に「白蓮華」（心の蓮）の花が美しく咲き誇っているように感じます。

六月十五日は弘法大師の御誕生日です。高尾山ではお大師様の誕生を祝し、慶讃法要を佐藤貫首導師のもと、大師堂において厳修致しました。

お大師様は宝龜五年（七七四）香川県善通寺で誕生され、遣唐使の留学僧として唐に渡り、密教の秘奥を学び、帰国後日本に真言密教を広められました。お大師様は承和二年に高野山奥之院にご入定なされたのち、今も人々を見守り、救い続けておられます。

初夏を感じる日差しを受け山中を練行する 第百二十二回 信徒峰中修行会

六月一日・二日(土・日)



佐藤貫首と記念撮影を行う修行会参加の皆様



裂帛の気合いで滝行を修す



俊源大徳が御本尊飯縄大権現様を感得されたと伝わる炊谷にて法薬をお勧めする

高尾山を修行道場とする「第百二十二回 信徒峰中修行会」が、五年ぶりに二泊二日の行程で実施されました。

山麓の不動院を出立した先達と修行者の約三十名は琵琶滝にて滝行、稲荷山コースで山上を目指し、途中で高尾山中興俊源大徳が御本尊飯縄大権現様を感得されたと伝えられる炊谷にて法薬を捧げました。

翌日未明、宿坊を出発して雨降る山中を練行し山頂にて富士山を遥拝、早朝の御護摩修行に参列されました。朝食後に修行者一行は東京多摩教区福傳寺住職・智山青年連合会々長の原祥壽師による「修験道とわたし」と題された法話を聴講しました。

その後有喜苑道場において、佐藤貫首大祇師のもと柴燈大護摩供が厳修され、修行者の皆様も共に祈りを捧げられました。



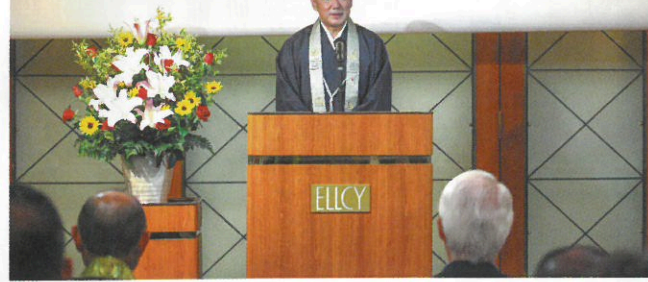
原祥壽先生による法話「修験道とわたし」



柴燈大護摩供にて一心に祈る

第四十九回 高尾山慶賛会通常総会開催

第49回 高尾山慶賛会通常総会



謝辞を述べる佐藤貫首



大野会長に御挨拶を頂く



浄瑠璃に合わせて舞う
ゆき乃恵成華さん(左)と藤村家元(右)



三味線を弾き浄瑠璃を謡う喜多川家元(左)

第四十九回高尾山慶賛会通常総会が八王子エルシィにて開催され、約八十名の方々に御参加頂きました。

高尾山慶賛会々長・大野彰氏の御挨拶により開会して様々な議事が進められ、無事全議案を承認頂きました。続いて高尾山協賛各団体に高尾山薬王院及び高尾山慶賛会より賛助金が贈呈され、佐藤貫首より謝辞が述べられました。

総会後には新内小唄喜多川派三世家元・喜多川保延さんによる、浄瑠璃三味線踊りの記念公演「恋織雪旅桑都照」が行われました。この作品は江戸時代の八王子宿と高尾山を舞台とした恋物語の新作新内で、喜多川家元の謡に合わせて、日本舞踊藤村流二代目家元・藤村藤之輔さんと八王子芸妓・ゆき乃恵成華さんが舞い、大きな盛り上がりを見せておりました。

観音菩薩の宗教

79

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

如意輪観音（その17）

前号で見たように、真言僧となるために不可欠とされてきた準備的修行を加行という。その加行に四段階あり、最初に修するの十八印契であり、これを十八道と称する。十八印契とは十八種類の印と真言のことで、真言行者が本尊をお招きして供養する作法を主旨とする。その起源については不明な点が多いが、「不空以後の密教における胎金合様の傾向のひとつ」とされる説や、「善無畏が蘇悉地経を訳出する以前から、賓客送迎のインドの俗法を模した諸尊供養の通用規則が用いられていた」と推測される説がある（上田霊城「新安流成立過程の研究（下）」『密教文化』一三

七号、一九八一年、一八頁）。善無畏、不空はインド人で、唐に密教をもたらした高僧である。ともに偉大な事跡、ことに訳経の功績を認められて唐の皇帝より三蔵の尊称を賜っている。三蔵または三蔵法師というと、唐の玄奘の固有名詞のように理解されることが多いが、実際は漢訳仏典の訳出に多大の貢献をした高僧たちに与えられた尊称である。恩賜の称号という意味で、三蔵法師は日本の大師号に似ている。大師号は偉大な高僧の遷化後に天皇から与えられる尊称で、史上二十五人の大師を数えるものの、「お大師様」「お大師さん」などといって、空海の固有名詞のように

捉えられることが多い。大師号同様、玄奘に奪われがちな三蔵法師の称号であるが、善無畏、不空もまた不世出の三蔵法師であった。善無畏三蔵は『大毘盧遮那成佛神変加持経』すなわち『大日経』を漢訳し、不空三蔵は『金剛頂経』や『理趣経』を漢訳したことで漢文による密教の理解・普及に大きく貢献した。不空はまた、眞諦・鳩摩羅什・玄奘とともに四大訳家のひとりに数えられている。

総じて仏教は師僧から弟子へと教えを伝えていく師資相承を尊重するが、なかでも密教は外部に非公開で伝承することを重視する。密教、また秘密仏教といわれる理由のひとつはそこにある。インド密教から唐を経て日本の空海に至る八人の実在した伝承者を真言密教の「伝持の八祖」といい、不空は四祖、善無畏は五祖となる。初祖はインドの龍猛すなわち龍樹で、

大乘仏教の大成者である。六祖に挙げられる一行は唐の魏州（河北省）出身の僧で、インド人の善無畏が『大日経』を漢訳する際、傍らにあつて助手を務めた。さらに二行は、善無畏が講説した『大日経』の解説を漢文の『大日経疏』として筆録している。一行の次の七祖が長安青龍寺の恵果阿闍梨で、留学生として渡唐して恵果に就いて密教を学んだのが八祖の空海である。「伝持の八祖」とは別に密教の正統性を示す「付法の八祖」では初祖を大日如来に仰ぐなど、より宗教性が高いが、六祖・不空、七祖・恵果、八祖・空海と最後は歴史的人物を挙げている。

以上のごとく密教は師から資へ正統的に伝持されてきたとされるが、その教えは教相と事相に大別される。教相とは密教の哲学・思想であり、言葉によって説明できる教理である。これに対し事相とは儀式・儀礼を実践

するための修法をいう。このふたつは理論と実践であり、車の両輪、鳥の両翼に喩えられるように、どちらが欠けても密教は成立しない。いずれの仏教諸派においても理論と実践は重要であるが、真言密教においては殊に事相の重要度が高い。事相の中で最も基礎的なのは加行の最初に位置する十八道で、空海はその作法を恵果阿闍梨より授かったと伝えられる。上述の論説に見るように、十八道の起源はインドにあり、善無畏や不空を経て恵果に伝えられたとされる。

十八道の根拠となる指導書は、空海が著したと伝えられる『十八契印』（大正大藏経、第十八巻、七八一頁）である。この書の来歴について鎌倉時代の真言僧の頼諭は、その著『十八道口決』に次のように述べている。頼諭は「十八道儀軌は誰人の作せる乎」（原漢文）と自ら問うたのちに、「大

師、恵果の口決を受け、之を記す也」（同）と答えている（山口真司「十八道の研究」『現代密教』第三号、智山伝法院、一九九一年、一〇〇頁）。口決とは、口伝のことであり、文字・文書ではなく口伝で教えることをいう。密教の伝承において最重要のことは、口決（また口訣）によって伝えられる。各寺院で用いられる事相の次第書でも、公にしてもよいことは文字によって説明されるが、究極の秘伝・秘訣

は「以下ロイ」として言語化されない。「ロイ」の口は口で、イは伝のニンベンを指し、これ以降は口伝によってのみ伝えられることを指す。頼諭によれば、空海は恵果の口説に基づき、『観自在菩薩如意輪瑜伽』ならびに『観自在菩薩如意輪念誦儀軌』における十八道の要文を抜粋して『十八契印』を成した（山口前掲論文）。その上で空海は『無量寿如来観行供養儀軌』等に基づき供養と念誦を合一する次第である

『十八道念誦次第』を作ったという（同）。頼諭の説明が正しいければ、十八道は恵果より口伝で空海に直伝された事相が基本ということになる。真言密教の修行は十八道を含む四度加行であり、「これを行ずるためには、古くは山岳の寺院等にもあるひとが多く、しかも内容は絶対に間違いの許されない世界」であり、「加行の行法すべては、儀軌・次第のテキストにもとづくと同時に作法（所作）そのものは、規則に順じて正確に行われた」とされる（真鍋俊照「空海と密教儀式」『中世文学』中世文学会、四四巻、一九九九年、一七頁）。

師資相承を絶対的なものとし、行者によってその変更を許さぬものであるとするならば、本来、密教、ことに事相は空海以来単一の修法のみが伝承され、異なる解釈や流派の生まれる余地はないはずである。密教が付法の八祖や伝持の八祖によ

り、インドの高僧、さらには大日如来に来源すると信ぜられるならば、教えの変更はあり得ぬこととなる。しかし、現在、真言宗は十六派を数え、それぞれで実践される事相においては代表的なものだけでも「野澤根本十二流」が挙げられる。野澤とは小野流と廣澤流の略称で、ともに空海入定後の平安中期に生まれた。小野流は小野曼茶羅寺の仁海を祖とし、廣澤流は廣澤遍照寺の寛朝が始めた流派とされる。これらは後に分派して十二、さらに細分化され多くの流派を生んでいった。



『真言八祖像』のうち不空。奈良国立博物館蔵。鎌倉時代
[ColBase] (https://colbase.nich.go.jp/collection_items/narahaku/97-4?locale=ja)

十八道において最も重要な本尊ですら、派により大日如来としたり如意輪観音としたりと相違がある。野澤根本十二流に含まれない中院流の『十八道念誦次第』には「本尊は金界の大日なり。（中略）総じて廣澤には通じて十八道の本尊には金界の大日を用ふるなり。

小野には如意輪を用ふるなり。安祥寺、三寶院等此の如し。但し中院並びに小嶋流に限って金界大日を用ふるなり云々」（『月刊密教講座』平河出版社、一九七四年に再録）とあり、流派による本尊の相違を述べている。伝承の絶対性と異なる流派の誕生は相容れぬものであるが、この矛盾をどのように捉えたらよからうか、これは筆者の年来の疑問である。筆者自身、真言某派の高僧に「事相も教相もお大師さんの教えの通りを守っていかなければならない」と言われたことがある。密教諸派とは離れるが、開祖を尊崇しその伝承の護持を重視する種々の芸道、例えば茶道や華道にも多くの流派が誕生している。私事であるが、筆者は長く空手道を嗜むが、そこにも筆者が学ぶ松濤館流はじめ諸派がある。絶対的護持と流派の発生は、密教史を考察するうえで

のひとりの課題である。

修 嚴 祭 変 神

六月七日(金)



神変様の御遺徳を偲び法要を執り行う

参道浄心門付近の神変堂において、神変祭が行われました。お祀りされている神変大菩薩は修験道の開祖で、役行者の名でも知られております。現在では健脚や腰痛平癒の御利益を求め、御参詣や登山の皆様が熱心にお参りされています。

神変様の御命日と伝わるこの日、神変様の教えとして、庶民の救いとなる、「生活の中の仏教」の実現を願って、しめやかに法要が行われました。

成田山勸学院生来山

六月七日(金)

真言宗智山派・大本山成田山新勝寺にある、僧侶の修行教育を目的とした勸学院の修行僧一名と引率の二名が、深緑の高尾山に来山されました。

一行は特別大護摩供修行にて、修行の無魔成満を祈念されました。成田山勸学院は、総本山智積院にある、智山専修学院と同様に、大勢の優秀な僧侶を輩出しております。



宿坊前にて佐藤貫首と勸学院の皆様

夏遊三千院
京都大原三千院
往生極樂有清園
孤獨女人成繪畫
前世來世業胎源

失恋し
京都の寺社に惚へれば
同じ宿命の女侍む

夏、三千院に遊ぶ
(永六輔氏曰く)『京都大原三千院、恋に疲れた女がひとり...』
青苔と杉・檜の深緑に溢れる『有清園』にひっそりと佇む平安時代の宝物『往生極樂院』...正に寂しげなる女性絵画に成る...きつと前世でも来世でも...浄土に舞ふ天女に違ひ無き...

西国四十九薬師霊場巡礼(4)

厚木市 荒井 一雄



ウエスタンミシガン大学御一行来山
六月十五日(土)

大正大学との国際協カプログラムの一環として、来日中のウエスタンミシガン大学の学生一行が研修のため高尾山を訪れ、滝行や回峰行、御護摩修行を体験されました。

いけばなの心 52

華道教授 佐藤 宗明



花材：燕子花(カキツバタ)、ふとい、ナツハゼ

今回の作品は水辺に生える植物と陸に生える植物を一緒に生ける、『水陸生』という作品です。

池坊では草木の性質を重視するので水辺に生える植物と陸に生える植物を一株に生けることはしません。そのため水陸生

では草木の性質に合わせて株を二つに分けて生けています。

この作品は水辺の植物としてかきつばたと、ふとい、陸の植物としてナツハゼを使用しています。かきつばたの柔らかい曲線に細い線が特徴の、ふ

とを取り合わせることで爽やかな雰囲気演出しています。また、ナツハゼと一緒に生けることで、作品の空間が横に大きく広がり、森を吹き抜ける風を感じる作品を目指しました。

水辺を広く見せる水陸生は夏から秋にかけてのみ生けられる手法です。今年も暑い夏となりました。少しでも涼し気な空気を感じて頂ければ幸いです。

江戸消防記念会 第十区高尾山木遣高聲會 木遣塚祭

六月十六日(日) 於・飯縄権現堂下踊場



佐藤貫首は総本山智積院において開催された智山派の宗務運営について議論するため、宗機顧問会に出席しました。

当日は智積院において大勢の僧侶の出迎えを受けて午後一時に登嶺し、会場である宸殿に移動され、午後二時より宗機顧問会に臨まれました。



当山貫首宗機顧問会出席
六月十七日(月)

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

55

十八世秀神13 護摩檀中の旗本・御家人

文化六年（一八〇九）成立の「江戸田舎日護摩講中元帳」（以下「元帳」と略す）に名が見える大名家を見てきたが、つづいてその下に位置する武士層について見てゆこう。

下級武士による信仰

「元帳」に先立つ「永代日護摩家名記」には、元禄一七年（一七〇四）の記事として江戸下谷に在住する野田弁五郎明喬、大塚安左衛門新保、河合重右衛門重共、森山又四郎秀隆の名がある。彼らは諱を名乗っていることから武士と目されるが、江戸後期に編纂された大名・旗本の家譜『寛政重修諸家譜』には名が見えない。当時は上野寛永寺の南側一帯を下谷と

いた。何らか願掛けの折には日光、筑波、相模大山へ代参を立てており、こうした行動自体は、当時の一般的な習慣とも考え得るが、川村は中山道熊谷新宿の福島屋平兵衛らへ護摩札の取次も引き受けていたことからすると、高尾山に特別な信心を抱いていた可能性がある。

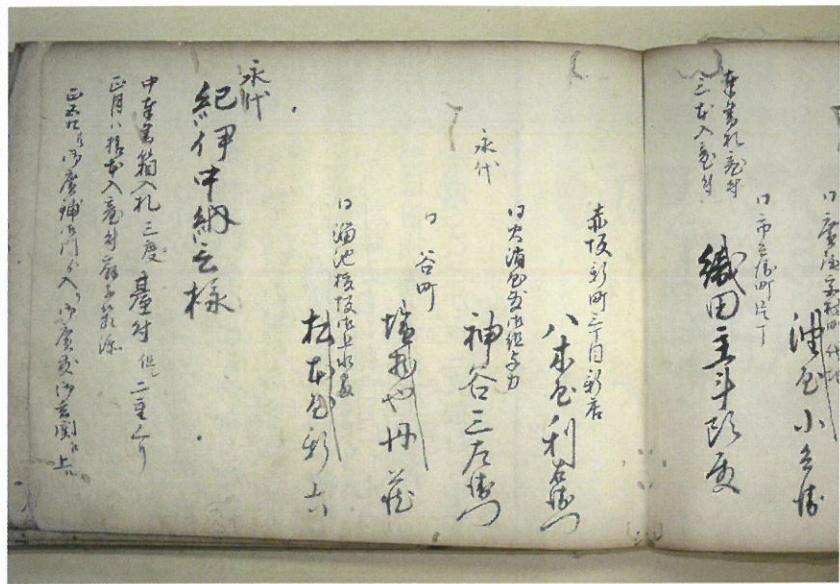
川村修富とその関係

「元帳」に収録された旗本の中でも、川村清兵衛修富はその実像がはっきりしている人物である。足高（今で言う役職給）を含め三〇〇俵取りの下級旗本だったが、日記を遺しており、下級旗本の勤務や生活の実相を知ることができる。川村は子息釜五郎や家来を高尾山へ代参に出して

大名の奥向きが寺社への信仰に影響力を持ったことは以前にも指摘した。そして、川村の上司であった側衆の平岡美濃守（頼長）の名が「元帳」に記されている。平岡は五〇〇〇石と大身の旗本で、將軍家斉が世嗣として江戸城西ノ丸に入った天明元年（一七八二）にその小姓となった。「元帳」には同時に小姓となった前田熊次郎（矩貫）の名も見える。前田は家斉の將軍就任を待たず中奥小姓に転出していたが、平岡とは相識つた間柄であり、両名が「元帳」に名を連ねるのは偶然とは思えない。林肥後守（忠英）は天明七年に家斉の小姓となっており、言わば平岡の後輩にあたるが、「元帳」の文化六年には側衆として同僚の立場にあった。

名族の後裔

さて、前田矩貫は二五〇〇〇石の旗本で、加賀百萬石の支流である。祖先をたどると豊臣秀頼政権下で五大老に名を連ねた前田利家に行き着く。その遠い昔の自家筋の末裔が織田主計頭（信由）である。織田信長の九男信貞は関ヶ原合戦で徳川方に参陣。子孫は旗本に列した。持高七〇〇石ながら、高家衆肝煎という役職にあった。「高家」とは江戸城中や幕府・朝廷間の儀礼を取り仕切る役で、字義の如く高い家格つまり、名族の系譜から取り立てられ世襲で勤めた。吉良上野介義央がよく知られている。前田の中奥小姓もまた殿中儀礼を司る役である。その接点を想像しなくなるが、裏付けは取



大名（紀伊徳川）、旗本（織田）、御家人（神谷）の記名の位置関係（法政大学多摩図書館寄託）

れそうもないので止めておこう。嫡流にはなくともネームバリューのある檀家を抱えることは高尾山にとって意義あることだったろう。

旗本御家人への配札

さて、武家の階層として、持高二万石以上が大名、

それ未満の旗本・御家人の区別を將軍へ「お目見え」する立場にあるか否かである。前号で家格と配札形態の相関を指摘したが、旗本・御家人について、その状況を見てみよう。一口に旗本と言ってもその処遇には大きな差がある。まず、領地を

付与された知行取りと、給与として米を支給される蔵米取りに分かれ、後者は少禄の者であったり、新規に取り立てられた者に多い。大名並みに何千石の所持高を持つ者から、奉公人を数人雇うのがやつとという蔵米取りまで様々であった。

本人」と小林と同格。その一方、矢橋熊之助は平賀と同じ四〇〇俵取りながら配札の内容は「奉書札台付、三本入台付、正月は板札添え」と、大身の平岡や島田と同格となっている。矢橋は正月串柿、五月自然薯、九月柿三〇籠が土産とされ、これは他にはない厚遇で、特別昵懇な間柄だったようだ。すなわち、持高や役職ばかりが配札内容の基準とはなっていない。大名クラス

付されていない。世間からの認識という点で、このような区別があったというのは意外な発見である。なお、このクラスでも串柿の土産が届けられる例もあり、記載の町人並みイコール冷遇ではないようだ。前出の石東などは「鼠口留守」という護符を受けている。他にはない注記なので本人が所望したものだろうから、高尾山のことをよく知っていたということになる。

平岡美濃守は五〇〇〇石の大身で、その名は町人に較べ頭一つ抜け出たページの中ほどから記されている。届けられる札は「奉書札台付、三本入台付、正月板札」と、大名の扇子「五本入」に次ぐ格式である。平岡の婿二五〇〇石の島田玄蕃は「奉書札台付、正月板札、三本入台付」と同様である。六〇〇石の川村富五郎は持高がぐつと少ないながら「奉書札台付、三本入台付、正月は板札添え」と、平岡・島田と同格だった。

御家人クラスはどうか。「武運札」が配札されるか肩書・居住地でそれと判断できる人物に、例えば赤坂火消屋敷組与力神谷三左衛門、上野与力町石井助三郎、四ツ谷新屋敷与力町石東治郎左衛門といった面々があるが、彼らは町人と同じ最下段に名が見られる「殿」の敬称も

「参考文獻」『新訂寛政重修諸家譜』（続群書類完成会、一九六四）、小松重雄『旗本の経済学』（新潮選書、一九九二）
おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

休み時間、クラスメイトがそれぞれおしゃべりなどをして過ごすなか、カナはぼんやりと窓の外を見ていた。

そんな様子に気がついた隣の席のユウトが声をかけた。「お前、元気がないな。腹減ってるのか?」「うん、まあね。違うよ!」

カナは思わず笑顔になって、ユウトの腕をパシッと叩いた。

カナはバレーボール部に所属する高校三年生。夏の大会に向けて、練習に拍車がかかる時期だった。だが、カナの気持ちは沈むばかり。(私は入学以来ずっと補欠。これが実力なのかもしれないけど、一度ぐらい公式戦に出てみたかった。レギュラーに選ばれてバンバン点を入れたかった...)。

最近では二年生の躍進が著しく、監督もこちらに期待をかけているようだ。(私の出番はないかも)。カナはまた溜め息をついた。

「おい、暗いぞ。俺様が話を聞いてやってもいいぞ」。ユウトは声が大きく大柄で、応援部に所属している。口は悪いけど、どこか憎めない感じでカナと気が合った。

「うん。バレーのことなんだけど...」。カナは悶々としていた気持ちを打ち明けた。ふんふんと聞いてくれたユウトは、おもむろに口を開いた。

「俺はさー、自分が勝つたことは一度もないんだよね。だけど人を勝たせたことはいっぱいある。それもかっこいいことだと思わないかい?」。

(たしかに...)。家に帰ってから、カナはユウトの言葉を思い出していた。(応援部が盛り上げてくれるからこそ、スタンドと選手が一体となり士気が上がる。試合はコートにいる人だけで戦っているのではないんだ)。

数日後、夏の大会の選手発表があった。二年生が多く登用され、カナの名前はとうとう呼ばれなかった。正直残念だったけれども、胸の中に確かなものが芽生えているのを感じた。

試合当日になった。カナは率先して大きな声を出す。すると周りにいる仲間も、自然と大きな声になった。その応援に呼応するように点が入っていく。

カナがふと応援部へ目をやると、ユウトは今日も汗びっしょりで大声を出している。偶然、ユウトと目が合った時、彼は親指を立てた。「グッジョブ!」。カナはそう受け



とった。

何度か危ういところがあった。カナの学校は初戦を競り勝った。大きな拍手で選手たちを迎えたカナは、ハグをして健闘をたたえた。

(今後、私が試合に出られるかどうかはわからない。けれども今日、精いっぱい応援できたことがうれしい)。カナは満足だった。

(挿し絵・小出 茂)

おはなし散歩道

私の精いっぱい

八王子市 池田美絵

高尾山 季節散歩

和風月名

文月

「ふみづき」

七月の異名として文月が一番知られているでしょう。有力な語源として二つの説があります。

一つは稲穂に実が入る時期という意味から「穂含月」、もう一つは書物を干す行事があり、文を披くことから「文披月」です。

今月の風物詩

夏野菜

高温多湿な日本の夏では、暑さと湿度のため疲労がたまり、栄養不足になりがちです。

そんな時には夏野菜を食べてみましょう。トマトやキュウリ、ナスにゴーヤなど、水分補給やビタミン摂取に効果的で、脱水症状や夏バテ防止に役立ちます。

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙「前向きになる」

八王子市 峰尾里枝子 様



一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

三十段 言い訳は迷いの道へとつながる

素直な謝罪の言葉を述べることは勇気がある事です。つい言い訳を言いたくなる時もあるでしょう。しかし結果として、より悪い状況に陥ることになりがちです。自分の非を認め真摯な態度を持つことを心掛けるようにしましょう。

◎健康登山の皆様へ

高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの、心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致します。皆様から投稿頂いたお話を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

※ 投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございます。すことを御了承下さい。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースで楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すペー

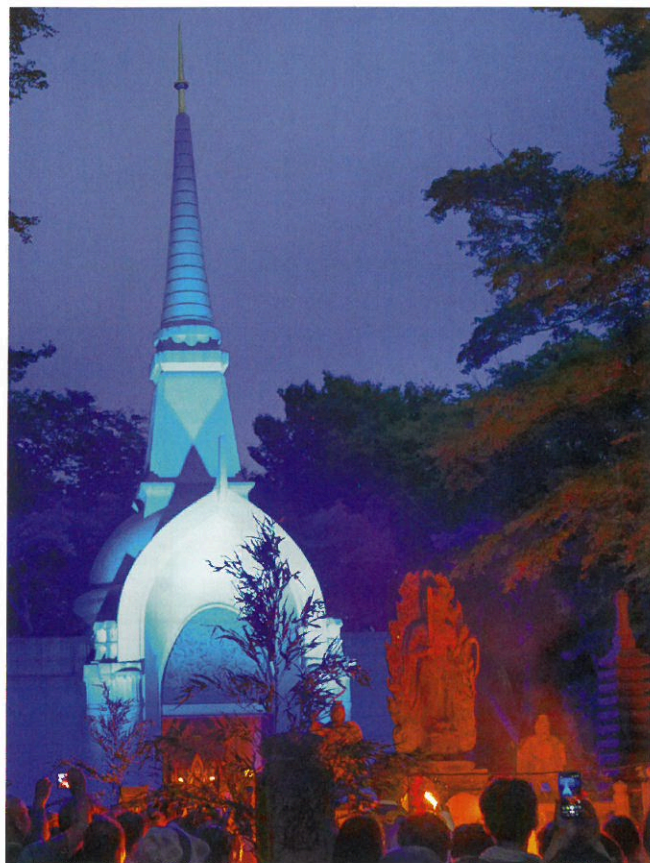


帳面……………七百円
スタンプ…百円

夏の高尾山 清涼体感めぐり 灯りの巡礼

真夏の高尾山では「灯りの巡礼」と称し、本年は八月二十四日に夕暮れ時から参道に並び立つ春日燈籠に灯りが点されます。また有喜苑では、世の平穏を願い希望の光を届けるため、仏舎利奉安塔を青く照らし出す「ブルーライトアップ」を行い、御信徒の皆様から御奉納頂きました紙燈籠を献灯致します。

同日には夕闇に包まれる有喜苑において、柴燈大護摩供を厳修し、世界平和・被災地復興に併せて御信徒の皆様の上安全、身体健全など諸願成就を一心に御祈念致します。



青く照らされる仏舎利塔の前で柴燈大護摩供が厳修される

紙燈籠奉納のご案内

来たる八月二十四日に高尾山で行われる「灯りの巡礼」にて、皆様各々の願いを込めながら、ご一緒に境内に祈りの光を灯してはいかがでしょうか。

紙燈籠には奉納者名と願い事を記し、諸願成就を御祈念致します。奉納を御希望の方は、ホームページ又はFAXにてお申込み下さい。ご不明な点等ございましたらお問い合わせ願います。

特別紙燈籠 一万円
紙燈籠 二千元

※特別紙燈籠をお申込みの方には柴燈大護摩供の際、お名前を読み上げ致します。

お申込み方法

左記QRコードより締め切りまでにお申し込み下さい。

ハガキやFAX等でもお申込み頂けますので、ご希望の方は信徒課までお問い合わせ願います。

TEL〇四二六六一二二五

締め切り

八月十六日(金)



紙燈籠



特別紙燈籠

高尾山子供やまぶし修行体験会

高尾山に古来より伝わる、やまぶしの修行体験してみませんか？

山に広がる大自然の中で、やまぶしと共に滝に入り、山歩きをして困難や試練に耐える強い心を鍛えてみましょう。

夏休みの思い出作りとしても、是非ご参加下さい。

日程 令和六年八月四日(日)
集合場所 高尾山麓不動院 午前八時集合
参加費 五千元
対象者 小学生(一年生〜六年生)
定員 五十名(定員になり次第受付終了)
行程 出発(不動院)↓滝修行(琵琶滝)↓山歩き(自然研究路)↓食事↓腕輪念珠作り↓御護摩修行参加(大本堂)↓下山(ケーブルカー使用)↓閉会式(不動院)↓解散(十五時四十五分頃)
左記QRコードより受付期間内にお申込み下さい。

申込方法 六月二十六日(水)九時から
受付期間 七月二十六日(金)十五時まで

※受付が完了しましたら子供やまぶし受付確認メール【自動配信】を送信します。

子供やまぶし受付確認メールに要綱(持ち物、服装等記載)・行程表を添付致しますので必ずご確認ください。

ご不明な点は、子供やまぶし修行体験係までお問合せ下さい。

電話 〇四二六六一二二五



いろは天狗の落とし文 ④

忍び耐えうる

心とは

やがて苦難の扉を

開く鍵となる

「禍福は糾える縄の如し」という言葉にありますが、苦難というものは表裏一体で避けては通れない、逃げられないものなのです。苦難の深さや大きさ、規模はその時々で様々ですが、苦難を耐え忍び、乗り越えていくことで、人は強くなり人間としての深みや味わいという人格が作られていくでしょう。

薬王院インスタグラム紹介

薬王院では、インスタグラムを用いて各種行事や四季が移ろいゆく風景を、写真や動画で御信徒様にお届けしております。

これからも様々な写真や動画を沢山アップしていきますので是非ともフォローをお願い致します。

下記のQRコードかURLから検索ができます。



TAKAOSAN_YAKUOIN

instagram.com/takaosan_yakuoin/



登山だより

☆神徳報謝百味飲食供

一日～七日

聖天秘供(聖天堂)

九日、二十一日

弁天秘供

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

二十一日

飯繩様御縁日

神徳報謝百味飲食供

二十四日

(九時大本堂)

月例写経会

二十五日

(十三時半山麓不動院)

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

二十八日

(十二時半山麓不動院)

奥の院開扉供養

(十時奥之院)

毎日の お護摩奉修時間

午前 9時30分
// 11時00分

午後 0時30分
// 2時00分
// 3時30分

ご講中・団体等
御相談下さい。



※八月の御詠歌勉強会は都合により休止とさせていただきます。

高尾山の昆虫 ナガヒョウタンゴミムシ



ゴミを食べる訳ではないのに、ゴミムシ(塵虫)と呼ばれる甲虫の一群がいます。

実際には肉食性であるため、捕食対象である小さな昆虫が集まるゴミの周辺で見かけることが多いのでそう呼ばれています。少し可哀想な気がします。同じ肉食性の歩行虫でもオサムシは、色彩や造型が変異に富んでいるため認知度が高いですが、ゴミムシは地味であるためかイマイチ人気がありません。その中でヒョウタンゴミムシの仲間が例外で、一見クワガタを彷彿させるような雰囲気を持ち異彩を放っています。

高尾山で見られるのはナガヒョウタンゴミムシ(長瓢筆塵虫)で、この仲間の最大種で黒い殺し屋の異名のオオヒョウタンゴミムシを小型化したような感じがあります。

海濱性が強い他のヒョウタンゴミムシと異なり本種は草地や山道等で見つかり、思いの他足が速く油断をすると見失ってしまいます。その名のように前胸と中胸の間が強く括れて、瓢箪状になります。

また前脚はケラのような形状で穴掘りに適応し、数珠状の触角、立派な大アゴ、漆細工のような強い光沢と見所満載の虫だと思えます。

(撮影・文松島 孝)

高尾山報助成金志納者
御芳名(順不同・敬称略)

- 富里市 森 照森
- 八王子市 芳澤 秀海
- 東松山市 根岸 裕基
- 熊谷市 大久保 智夫
- 川口市 飯嶋 よしこ
- 府中市 永田 新一
- 八王子市 鈴木 長一
- 世田谷区 長澤 美江
- 八王子市 十一丁目茶屋
- 駒ヶ根市 田中 重明
- 入間市 細田 信夫
- 所沢市 青木 和子
- 青木 永次
- 新座市 彰山 粧麗
- 高尾山健康登山者一同

高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>
 下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます

発行所
 東京都八王子市高尾町2177
 大本山
 高尾山薬王院
 郵便番号 193-8686
 電話(042)-661-1115(代)
 FAX(042)-664-1199
 発行人 犬山秀康
 編集人 菅井倫浩
 印刷 ヒラツカ印刷社
 毎月1回1日発行
 1部50円